The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「近すぎない」関係の形成と「ストリート」の生成 : イタリアの都市ボローニャにおける Social Street の実践
Author(s)	井本, 恭子
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2020, 60, p. 107-126
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76053
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「近すぎない」関係の形成と「ストリート」の生成

――イタリアの都市ボローニャにおける *Social Street* の実践――

井 本　恭 子

1　はじめに

イタリア北部の都市ミラノには、'casa di ringhiera'「欄干の住宅」あるいは 'casa a ballatoio'「バルコニーの住宅」と呼ばれる cortile（袋小路）付きの低層アパートがある[1)]。ミラノの近代化、都市の拡張とともに大量に移動してきた人びと、とりわけ南イタリアからが多かったのだが、そうした「労働力」に提供されたワンルームの集合住宅で、かつては郊外にも中心地に隣接する地区にも数多く見られた。こうしたアパートは、文字通りの住宅である一方、都市ミラノの社会変化が語られるとき、都市の生活とは対称的な人のつながり、共同性、連帯といった関係からなる paese（パエーゼ）を象徴する空間になっている[2)]。

すでにその多くは、取り壊されたり、老朽化して廃墟になったりしているが、中心地に隣接した地区では、近年、リノベーションによって美しい「レトロなアパート」に生まれ変わっている[3)]。もちろん、「レトロ」なのは当時の特徴を見せる外観だけである。もう少し丁寧に説明すると、二重の「戸外」――アパートの門が面した通りとアパートと門を結ぶ cortile（袋小路）――の側にある細長いバルコニーに面して、各住戸のドアと窓が連なるように並ぶ、独特な構造の保持である。かつては、各階のバルコニーの突き当たりにあったトイレは、プ

1）19 世紀末から工業都市として発展してきたトリノにも、同様のアパートがあった。現在では、中心地に近い Vanchiglia（ヴァンキリア）地区など限られたところに、わずかに残るのみである。経済発展を支えてきた「労働者」の住宅は、そのユニークな外観を生かしたリノベーションで、すっかり新しくなったものもある。ローマの郊外を代表する公営住宅としては、南西部に 1200 世帯を抱える巨大な 'Corviale'「コルヴィアーレ」がある。1972 年、マリオ・フィオレンティーノによって設計された、長さ 1km にも及ぶ細長いコンクリートの塊のような建物で、'Serpentone'「大蛇」と呼ばれている。当時は、'baraccopoli'「スラム」に住んでいた人びとのために用意された住宅であった。

2）Micoli, Alessandra (2008), Milano, Isola: narrazione e comunità, *Tracce di quaritieri: Il legame sociale nella città che cambia*, Cremaschi, Marco (ed.), FrancoAngeli, pp. 83-106.

3）例えば歴史的中心区にある Brera（ブレーラ）地区、ミラノ中央駅に近い Isola（イーゾラ）地区（第 9 区）、運河沿いの Naviglio（ナヴィリオ）地区（第 6 区）である。

ライベートなバスルームになり、ワンルームは自由に連結可能になり、生活の機能面や好みが重視され、たとえエレベーターがなくとも、快適で洗練された集合住宅になったのである。かつてのような擬似的な地縁空間や拡大家族のような関係は、もはやそこにはない。バルコニーや cortile（袋小路）も、おしゃべりしたり、集まったりする「戸外」の「社交の場」ではない。

さて、前置きが長くなってしまったが、筆者がここで考察したいのは、昔のようなインフォーマルな「社交の場」を流動的な社会の固定点として、復活させようとする住宅のプランニングではない。何らかの類縁性や同一性を前提としない、「ここに住んでいる」という事実しかない人たちが、お互いを「隣人」として扱うことによって、自ら直接的に関わろうとする「ストリート」の実践である。具体的には 2013 年 9 月、イタリアの都市ボローニャのサント・ステファノ（Santo Stefano）地区にある、長さ 400 メートルのフォンダッツァ通り（Via Fondazza）[4]から始まった *Social Street* の実践の動態的側面に着目していきたい。動態的側面とは、フェイスブック・グループを活用して形成されたヴァーチャルな「ストリート」に集うメンバーの「社交」と連動するように、メンバーでもインターネットのユーザーでもない住人たちからも、現実のストリートでさまざまな利他的な行為が生まれ、「隣人どうしの関係」が展開されるストリートへと変容する一連の動きのことである。かつてのミラノの低層アパートとは異なり、ストリートがさまざまな対面的な関係の要になるのは、人びとのあいだにストリート以外に何も共有するものがないことの表れかもしれない。しかし「場の共有」があるだけで他者と連なるのだろうか。

本稿の目的は、*Social Street* のヴァーチャル／リアルのストリートにみられる住人たちの具体的な行為に着目して、住人どうしのあいだにどのような関係が生まれていったのか、その関係はいかなる形式をもち、それによってリアルなストリートはどのように変容するのかを明らかにすることである。この考察の主眼は、イタリア社会の文化的特質そのものというよりも、ストリートの隣人どうしの関係性に、相同性や関連性を前提としない、別の形式の関係のありかたやつながりが現れることを示すことにある。それは人と人とがともにあるとはどういうことか、つながり、共同性、連帯とは何かという根源的な問いに向けての試論となるだろう。

4）ボローニャはイタリア中部エミリア・ロマーニャ州にある人口 39 万弱の都市である。6 つの管理・行政区からなり、Santo Stefano 地区は城壁内にあり、約 5 万人が住んでいる。フォンダッツァ通りは、中心から城壁の南端へと放射状に伸びるマッジョーレ通りとサント・ステファノ通りの間にある。91 の建物があり、約 1,800 人が住んでいる。

2　流動性のなかの社会的実験場：*Social Street*

2-1　*Social Street* の始まり

Social Street は、さまざまな人びとが日常的に移動する都市で、居住の場に新たなつながり、共同性、連帯性をつくる実践として注目されている。それは、イタリアの都市に住む人びとが、他者とかかわらなくなったからではない。似たような生活スタイルや同じ趣味や興味や価値観をもった人を選びながら生活しているため、もはや住むことは空間を占有するだけで、各住戸は周囲と分離して隣接しあう者たちの関係が成り立ちにくくなっているのである。最も「近い」存在であるはずの隣人が、「見知らぬ人」という状態がふつうなのである。実際、*Social Street* の実践が活発なボローニャやミラノには、共通の目的や楽しみをもった人びとが集まるアソシエーションや活動グループ――組織化しないインフォーマルなものも含めて――がいくつもあることは、空間的近接性よりも親密さの共有を優先させている一つの証左になるだろう。筆者が *Social Street* に注目するのは、選べない「隣人」――非選択的なもの――を放棄したり、選べる関係に転換したりするやり方とは異なる方向を示しているからである。そのような実践とはいかなるものか、まずは発生から展開のあらましを見てみよう。

主な資料となるのは、いち早く *Social Street* に注目して自身が居住するミラノで調査を行なっている社会学者 Pasqualini の研究、考案者であるバスティアーニ自身のブログやインタビュー記事、*Social Street* のウェブサイト、「ヴァーチャル・ストリート」への投稿、メディアの取材記事、フェイスブック・グループのメンバーや住人たちへの聞き取り調査である[5)]。

5）Pasqualini はボローニャ発の *Social Street* が都市ミラノの中心部に近接する地区に一気に広がる状況を 2013 年から調査している。現在、*Social Street* は 428 あり、ミラノにある 77（ボローニャは 67）すべての分布、活動状況を記録し、住人や活動グループへの直接インタビューおよびウエブアンケートを行っている。Pasqualini はミラノにおける近隣どうしのつながりが希薄になっている現状を変える方法として *Social Street* の有効性を明らかにしている。つながり、連帯性の回復が、都市の荒廃やコモンズの問題解決になると考えているようである。
本稿で扱ったボローニャのフォンダッツァ通りに関する聞き取り調査は Cornetta および Artusa によるものである。創設者であるバスティアーニはさまざまなメディアで活動について記事を書いたり、インタビューに答えたりしており、すべて網羅した訳ではないが、その大部分を参照サイトにあげておいた。フェイスブック・グループは原則非公開のため、Cornettao および Artusa の精力的なデータ収集に負うところが大きい。Cornetta の関心はヴァーチャル・コミュニティ研究にあるため、*Social Street* を居住場所を介したヴァーチャル・コミュニティの一種と捉え、コミュニティ感覚（共同性という意味）や協同性を引き出す要因について、ボローニャの「フォンダッツァ通りの住人たち」とミラノの「ファリーニ通り＆イーゾラ地区の住人たち」の二つを事例にあげて考察している。Artusa はネイバーフッドの自己組織化のプロセスについて、ボローニャのフォンダッツァ通りとブエノスアイレスのリベラの近住ネットワークを比較しながら論じている。本稿はいずれの研究にくみするものではないが、Cornetta も Artusa も質的な調査をしているので、その生のデー

Social Street は、ボローニャの中心地区に近接するサント・ステーファノ地区のフォンダッツァ通りに妻子とともに引っ越してきたフェデリコ・バスティアーニの思いつきから始まった。同じ建物、通りに住んでいても、なかなか知り合いができないし、自分の息子も近くに遊び相手がいない、こうした分離状況を打開すれば、もっと生活がしやすくなると考えたと言う。そのために、彼が育った小さな町のようにみんなが顔見知りではない都市の「控えめな」人間関係を背景に、なれなれしいと思われたり、不信感をもたれたりすることなく、住人とコミュニケーションを可能にする手段を見つけることが重要だったとも語っている。つまり、空間的近接性（居住の場所）と住人を結びつけ、その住人たちと知り合う工夫をしなければならなかったのである[6)]。

そのようなバスティアーニの個人的な生活にかかわることから、フェイスブック・グループを活用してウェブ上に「ストリート」空間をつくるアイデアが生まれたのである。彼はフェイスブックを選んだ理由として、「近くて遠い」存在の隣人との距離をあいまいにしてくれること、最も利用されている無料のソーシャル・メディアであることをあげている。それだけではなく、相手の「顔」＝「ストリート」の住人の誰かと居住の場所の「顔」＝フォンダッツァ通りが、はっきり見える。言い換えれば、「顔」という夾雑物が入り込むヴァーチャルなストリートを可能にするからでもあろう。事実、ヴァーチャルなフォンダッツァ通りのメンバーになるためには、「実際に住んでいること」が条件で、管理者のバスティアーニによって名前と番地が確認される。

こうしてバスティアーニは 2013 年 9 月、「フェイスブック・グループ　フォンダッツァ通りの住人たち――ボローニャに参加を！」と書いたビラをバール、商店、工房に配り、あちこちの建物に貼って、ウェブ上に「フォンダッツァ通りの住人たち――ボローニャ」を開設し、それを *Social Street* と名づけて活動を始めたのである。わざわざビラを用意したのは、さまざまな理由でフェイスブックを利用しない／したくない人にも関心を持ってもらうためだったと言う[7)]。そのビラには、フォンダッツァ通りの写真とともに以下のような文が添え

タを活用させてもらった。

6）イタリアにおいて一般的に、住居を中心にした「近さ」の範囲については、住人は同じ集合住宅、次いで住居のあるストリート、広くても地区までだと認識していることが、以下の研究者によって指摘されている。
Mutti, Antonio, *Il buon vicino: rapporti di vicinato nella metropoli*, Il Mulino, 1992.
Artusa, Maria, *Pratiche e percorsi di auto-organizzazione di vicinato: il fenomeno della Social Street a Bologna e le reti di prossimità (o di vicinato) a Buenos Aires*, tesi di Dottorato, AMS, Università di Bologna, 2016.

7）バスティアーニはビラを貼っていた当初のことを次のように語っている。「ビラが住人たちの関心を引いていると感じていた。メールアドレスをビラに書いていく人がいたので、メーリング・リストを作成し、何か企画するときは必ず、メーリング・リストにも情報を流すことにした。メールも使わない高齢者には、彼らの携帯電話にあるメッセージ・アプリ WhatsApp を介して、ある種のおしゃべりができた。このおしゃべりは口コミにもなった。」このようなさまざまなコミュニケーショ

られていた。

> 社交、交流会の企画、急を要すること、要望をみんなに知らせるために、この歴史的なストリートに住人たちの集まる場所を、ある種の「ストリートの掲示板」をつくることが目的です。

スタートしてから短期間で350人以上のメンバーが集まり、ヴァーチャルな空間に生活情報、困りごと、交流イベントの告知など活発な投稿が行われた。その後、*Social Street*は考案者であるバスティアーニも予測しなかった展開――二つの動態的側面――をみせてゆく。それは意図せざる結果と言ってもよいだろう。一つは、*Social Street*がボローニャだけでなく、ミラノやローマ、イタリア以外の都市へと急速に広がったことである。Pasqualiniも指摘するように、*Social Street*において「数」はそれほど重要ではないが、バスティアーニをマニフェスト作成に向わせ、*Social Street*に一定の形を与える要因になったのは、急速な広がりそのものである［Pasqualini　2018c：89］。もう一つは、先述したように、ヴァーチャルよりも現実のフォンダッツァ通りの方へと、住人たちが自発的に、お互いに直接的に関わろうとする態度をみせること、「隣人たちがネットで助けを求め、お互いに直に手を差し伸べあう」関係に呼応するように、隣人とともに／のために何かをする住人たちと「ストリート」の変容が共振することである。まずは、バスティアーニの*Social Street*にとどまらず、それが「お手本」となる様子からみてみよう。

2-2　*Social Street*の広がり

スタートして2年後には、「フェイスブック・グループのつながりが、ネイバーフッドを形成する」ユニークな例として、国内外のメディアに大きく取りあげられ、*Social Street*は一躍脚光をあびることになった[8)]。流動的な都市の生活におけるつながりや共同性の問題を解決する方法として、プラットフォームやアプリをつくる新たなソーシャル・ビジネスでもなく、任意の活動グループとも異なることが注目されたのである[9)]。既存のソーシャル・メ

ン媒体（デジタルに限らず）を利用して、フォンダッツァ通りの住人たちを巻き込んでいったことは、Pasqualini, Cornetta, Artusaも指摘している。

8）The New York Timesの2015年8月25日の記事“Italian Neighbors build a social network”の影響は大きい。

9）co-housingのような共同性をテーマにした住宅やアメリカのNextDoor、カナダのi-Neighbors、フランスのPeupladeといった近隣どうしの共有や協同を目的として作られたプラットフォームと比較されることが多い。イタリアのウェブサービスには、vicinimieiがある。パリの街区では、Charles-Edouard Vincentが考案した「ストリートのコンシェルジュ」*Lulu dans ma rue*という住

デイアを活用して、メンバーでない住人たちともともに居住の場所に社会関係をつくりあげる実践だからである。

バスティアーニはこうした関心の高まりとともに、問い合せが多くなる状況に即応し、もう一人の管理者ルイージ・ナルダッキオーネとともに、公式ウェブサイト“*Social Street*：*dal virtuale al reale al virtuoso*”「*Social Street*：ヴァーチャルからリアルへ、そして隣人たちの空間へ」を開設した[10)]。*Social Street* は個人が自発的に実践するもので、組織化しないインフォーマルなつながりが主体になっているため、そもそも規則はない。しかし、急速に拡散する状況では、フェイスブックが同じストリートに住んでいる人へ「知り合いましょう」と呼びかける方法、住人どうしの「控えめな態度」や警戒心をなんとかするための、費用のかからない方法であったとしても、ある種のマニュアルを兼ねたマニフェストの提示が必要となったのである。「*Social Street* はある種の銘柄になってはいけない」とバスティアーニ自身も懸念しているように、*Social Street* と呼ぶ「基本形」がなければ、住人を隣人にする関係の基底にある「社交」は消えて、たとえば物々交換やシェアリング・エコノミーの実践のみが一人歩きする可能性もあっただろう。このマニフェストによって、*Social Street* の目的と原則が明示された意味は大きい。では、ウェブサイトに掲げているガイドラインをまとめてみよう。

・隣人どうしの社交を促すことを主眼において、あらゆる活動をする。
・社交、無償の行為、非排除性は *Social Street* に不可欠な原則である。
・*Social Street* は住人ひとりひとりの具体的な協力で成り立つもので、そこに外部からの金銭的な支援を入れることはできない。
・フェイスブック・グループは、住人によって作られ、自分たちで管理・運営すべきもので、機関、組織、団体、党派などは絶対に入れてはいけない。
・フェイスブック・グループのメンバーは居住者に限定する。名前は「*Social Street* ○○通りの住人——都市名」を推奨する。

このように *Social Street* の「基本形」はシンプルで、誰でもどこでもスタートはできる。だが、すべての *Social Street* が「ヴァーチャルからリアルへ、そして隣人たちの空間へ」の

人のための住人によるサービスがスタートしている。ベビーシッター、買物、犬の散歩、家事の代行など暮らしの細々としたサービスが必要な住人とそれを提供する住人をつなぐビジネスである。街角にキオスクのような店舗があり、そこで申込や相談ができるが、電話やメールも受け付けている。地域密着型のサービスなので、住人と住人をつなぐだけでなく、雇用創出にもなる。イタリアでは「ストリートの管理人」と呼ばれている。

10) *Social Street* のプロセスを的確に捉えたナルダッキオーネの命名である。

一連のプロセスをたどるかどうかは別である。メンバーが多くても、投稿がゼロで休眠状態（ヴァーチャルで終わる）のものもあれば､隣接するストリートと結合して一つの地区になり、住人たちの活発な社交空間へと変わっていくものもある［Pasqualini　2018c］。一時的に広がっても、実際のストリートの変容に至るものは多くはないというのが現状である。このことは、*Social Street* の成功や失敗というよりも、そのような違いが何を示しているのかという観点から問われなければならないだろう。しかし、本稿の考察の主眼は、*Social Street* それ自体の比較検討ではないので、ここでは立ち入らない。

ボローニャのフォンダッツァ通りの場合は、バスティアーニの創意工夫とは別に、実際のストリートの住人たちが思い思いに行動し始める。誰か（隣人の）とともに、あるいは誰かのために、自分ができることを、やりたいことを実践するようになっていく。それは *Social Street* のもう一つの動態的側面である。

３　住みなおされる「ストリート」

3-1　日常の反復

フォンダッツァ通りのフェイスブック・グループのメンバー＝住人たちは、ヴァーチャルな空間へさまざまな投稿をしている。バスティアーニが最初のチラシに書いたように、住人が集まる「ストリートの掲示板」である。たとえば、Cornetta が整理した１ヶ月分の投稿をみてみよう［Cornetta　2015：245-246］。

・情報提供を求めるもの（ストリート在住の医者の名前、週末に借りられる部屋、遺失物の発見など）
・モノの有効活用（使わない家具の提供、さまざまな種類のモノの一時的な貸借、行けなくなったイベントのチケットの提供など）
・経験や専門知識を要する手助け（引越しの手伝い、カメラの修理、棚を吊るなど）
・住人とストリートの関係を強調するもの（新メンバーへの歓迎メッセージ、ストリートの生活に関する記事や写真、Social Bike など）
・文化行事の告知や提案（ボローニャ方言の講座、芸術関連のイベントなど）

こうした投稿の内容の雑多性そのものが、メンバーの誰かとの日常生活でのつながりや擬

似的な対面を求める行為を示している[11)]。もちろん、すべてのメンバーが投稿しているわけでも、応答しているわけではないが、「いいね」をクリックすることで、あるいはコメントすることで、そうした対面の場に参加している。いずれにしろ、重要なのはメンバー＝ストリートの住人からの投稿に対して、どんなに些細なことでも、手を差しのべる誰かが必ずいることである。その誰かは、もちろん、ストリートの住人の誰か、隣人である。投稿＝応答の行為の繰り返しが、日常的にお互い「顔」を合わせる、知り合うストリート、すなわち、近くに住んでいる誰か（大雑把に捉えられる）と擬似的に対面する空間をつくりあげている。バスティアーニは投稿＝応答する行為そのものの重要性について次のように述べる[12)]。

> 誰かが漠然と助けを求めているとします。たとえその問題に解決策がないとしても、とにかく応答があります。ありきたりな答えだとしても、なにがしかの方向を示すことにはなります。応答して損することはありません。ネットワークの匿名の誰かではなく、知り合いではないけど、家から 20 メートルのところに住んでいる誰かのために、あなたは応えているのです。誰かというよりも、あなたの近くにいて、助けを必要としている誰かのためだということが、あなたを促すのです［Cornetta　2015：250］。

投稿＝応答する行為そのものに加えて、質問の繰り返しについても、バスティアーニは興味深い発言をしている。

> いつも同じ質問を書く人がいるので、フェイスブック・ノートによくある質問のリストを作成する *Social Street* もあります。私たちフォンダッツァ通りでは、そのようなことはしませんでした。私たちにとっては、こうした質問が繰り返されることこそが重要だからです。グループに登録したばかりの人は、私が 3 ヶ月前にみた投稿を始めて見て、その質問に答えることに決めるのです。その人の答えは同じものではなく、アドバイス

---

11) Artusa は以下のような具体的な投稿の例をあげている。
「フォンダッツァ通りの住人のみなさん！！！近いうちに倉庫を片づける予定なので、いいものが出てくるでしょう。私の身近なフォンダッツァ通りの住人に、真っ先に、あげたいと考えています」［Artusa　2016：106］。
「明日、天気がよければ、ラヴィーナ・フォンターナ公園の軽食パーティーに行きましょう！　たぶん 18 時」［ibid.：107］。
「フェデリーカ、ニコーラへ　うちのドアの前になす、ズッキーニ、レモンなどを入れた袋を置きました。よかったら、持って行ってください。要らなければ、他の隣人にあげてください。捨てるのはもったいないので。よろしく」［ibid.：107］。

12) 自己利益（宣伝）や政治的･宗教的イデオロギーの強い投稿や攻撃的な言葉に対しては､バスティアーニが「社交」の場にはそぐわないことをそれとなく伝えている。分断したり対立させたりする内容の投稿には、メンバーからも *Social Street* の原則を守るようように注意される。

を加えています。ですから、必ず新たな相互作用があるのです。こうしたことはすべて、現実のストリートで知り合い、つきあうための機会になるかもしれません。私にとって、社交はこういうことなのです。あなたが何かを必要とするとか、何かを交換したいとき、フェイスブック・グループに投稿すれば、それを見て答えてくれる人たちがいて、お互いに知り合うのです。誰も投稿しなかったら、知り合うこともなかったかもしれません［Cornetta　2015：254］。

Social Street の基底には「社交」＝ストリートで顔を見せ合うがある。この「社交」とは、ストリートへの投稿＝応答という日常的な行為の繰り返しによって、住人の誰かを具体的な存在（住人 A さん）として、その都度対面的に生成させることである（図 1）。そして、ヴァーチャル・ストリートで顔を合わせる住人たちの「ストリートの隣人」として、互いに要求を満たしあったり、ストリートの交流に協力したり、分かち合ったりする行為が、実際のストリートへも連動していくのである。次節では、*Social Street* の実践の一方で、自発的に動き出す住人たちの行為に着目して、ストリートの隣人の関係性とストリートの変容をみてみたい。

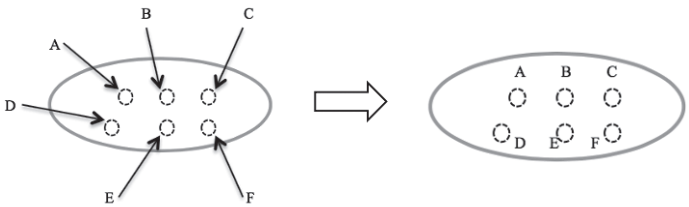

図 1　ヴァーチャルなストリートへの投稿の反復と隣人の形成

3-2　ストリートの「隣人」としてふるまう

Social Street の実践は、互いに必要なモノや情報のやり取りにとどまらず、日常生活のさまざまな局面での扶助や協力、ストリートの社交の促進をしながら、メンバー以外の住人たちと関わっていった。その一方、ストリートの誰かのために、各人ができることを、したいことを、思うようなやり方で自発的に実践する住人が次々出てきた。その具体例をいくつか紹介しよう。クリスマス休暇中にインフルエンザで寝込んだ大学生のために、薬を取りに行く人、みんなが使えるように工具箱をストリートの八百屋に置いてもらう人、公園の掃除を始める人、助けが必要な高齢者が誰でも電話できるようにと、自分の電話番号を靴職人に預

ける人などである[13)]。ストリートの住人のための行為を「善意の隣人」あるいは「善意」に目覚めた住人のふるまいとして、片付けてしまってはいけない。「善意」は自律的に存在する主体に属するもので、ストリートの隣人のあいだにあるものではないからである。つまり、あいだにあるのはストリートの隣人どうしの関係性で、それが扶助、協力・協同、分かち合いの具体的な行為の基底にあるという意味である（図2）。

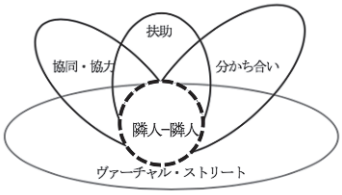

図2　隣人どうしの関係

ストリートの「社交」が重視されるのは、特別な必要性も目的もなくただ集まる場で、どんな人物かは知らなくとも、対面する相手は誰でも「ストリートの隣人」として向き合うことが求められるからである。そうした形式的な「隣人」は、一方的に表象化（たとえば「善意の隣人」）された既知の存在や自分が望むような行動をとると期待される存在とは別次元にある。つまり、形式的な「隣人」とはそれ自体で独立して完結せず、ストリートで直接的に対面する相手との関係のなかで現れる存在のことなのである。このようにお互いが隣人どうしであること――関係の対称性――は、たとえば、与える側と受け取る側をあいまいにする行為に示されている。また、住人たちのさまざまな「隣人」への行為に、非対称性を持ち込むような慈善が避けられているのも、その証左となろう。

さて、このような「隣人どうしの関係」が展開されるストリートは単なる「善意の隣人」の集合する空間ではなく、住人であれば誰でも「隣人」として扱われる日常的な公共の場として浮上してくるのではないだろうか。その様相については後述することにして、まずは住人たちがストリートの変化をどう捉えているのかを見てみよう。

Artusaのインタヴュー調査をみると、*Social Street*の実践の影響と結びつけてストリートの変化を身近なところで捉えている[14)]。インタビューに答えた住人たちは、これまでとは異なる隣人たちの行動から、ストリートを見ているのである。たとえば、ストリートが社交の場になっていること、住人たちが自分のできることを隣人やストリートのために自ら進んで行うようになったことを変化と見ている住人たちは、次のように語っている。

> ひとりひとりが他人のために、無償で、何の見返りも求めずに、できることをするんです。よき隣人たちのためというだけなのです。お互い顔見知りでなかった人たちが、それぞれ自分ができる範囲で、ストリートのために共に作業をしたり、協力しあったりするようになったなんて、すばらしい［ibid.：103］。

13) Social street di via Fondazza, la prima di tutte: intervista a Federico Bastiani, *VOLABO*, https://www.volabo.it/, 11/01/2017.
14) Artusa, Maria Susana, op.cit., 2016.

今は、近所に住んでいる人の顔を、前よりも見るようになっています。大家族みたいです。*Social Street* は非常に異なっている人たちを近づけ、壁を壊していくと私は思います［ibid.：112］。

また、2014 年 12 月に自宅が火事にあった女性は、ストリートの隣人たちの支え合いを身をもって体験したと述べている。彼女の「連帯」という言葉からは、隣人に助けられてはじめて、自分もストリートの一員であると実感したことが推察される。

Social Street が言っている連帯を、まさに私は体験しました。6 ヶ月間自宅に戻ることができなかったとき、5、6 人の隣人たちが、彼らの家に来るように言ってくれました。人びとが互いに顔見知りであるようなストリートは、あなたの生活を助けてよりよいものにしてくれるのです［Artusa　2016：111］。

住人たちにとって一番の変化は、ストリートの「顔見知り」になったことであろう[15]。これまで独立して存在していた住居が、ストリートと（再）結合することによって、お互いの居住の場となったと言い換えてもよい。直接的に隣人に関わろうとする住人たちのふるまいも、前述の体験談にあるような「自分が困ったことになっても、隣人の誰かがいる」というつながりの感覚も、それが基盤になっている。*Social Street* の実践が現実のストリートと共振して、新たな意味をもったストリート、「隣人たちのいる空間」に変えたのである。

次節では、「隣人どうしの関係」が出現させる、ストリートの空間的秩序はいかなるものか、再びストリートでの具体的な行為の微細な面に着目しながらみてみよう。

4　日常的な公共の場

「隣人」は、自律的に存在する主体ではなく、常にストリートの住人の誰かとの関係のなかで現れる存在、相手を必要とする形式的な関係性であることはすでに述べた。お互い「○番地」「□番地」に住む人物として大雑把に捉えられるだけだが、主体として十分に認識された存在で、私的空間の「外（戸外）」のストリートの側にいる[16]。そのストリートは、具

15) *Social Street* の実践以前は、住人たちはストリートで挨拶を交わしたり、二言三言言葉を交わしたりするだけであった。実践後は、挨拶が減った分、モノの交換や扶助が増えている［Artusa 2016：152–153］。このようなコミュニケーションの変化は、ストリートの住人どうしの関係性の変化を示していると考えられるのではないだろうか。

16) 例えば、「こんにちは、○番地の方ですよね」「私は□番地の者です。確か先日のパーティーでお会いしましたよね」といったやりとりにみられるように、固有名詞ではなく、居住地で特定するやり

体的な行為を通して自分が直接かかわることのできる範囲＝フォンダッツァ通り、あるいは自分との関係がわかる広さ＝住居があるストリートとして明確な領域性を持っている。それは *Social Street* の実践に負うところが大きいだろう。しかし、ヴァーチャルなストリートの擬似的なつながりの感覚は、ともにいるメンバー以外に共有されることはない。リアルなつながりの感覚は、実在のストリートにともにいる住人どうしが直接的にかかわるなかでしか生まれない。しかも、単なる利害の結びつきとは異なる、「隣人どうしの関係」は空間の相、つまり、形式的な「隣人」への行為が作用する住居（私的空間）／住人とストリート（戸外）／隣人の関係性に現れるはずである。そこで、住人の具体的な行為を手がかりに、空間の移動から捉えてみる。

ここで再び「ストリートの誰かのために、各人ができることを、したいことを、思うようなやり方で自発的に実践する住人」（第 3 章）の扶助と分かち合いの例をみてみよう。まず、クリスマス休暇中に寝込んだ大学生 A のために、薬を取りに行ってあげた住人 B の例では、A がストリートに助けを求めるという行為は、住居からストリートへ出ることで、それに応えて薬を届けた B は、ストリートから住居に入ることになる。つまり、A と B の行為を空間から見れば、住居からストリートへ、ストリートから住居へと移動しているのである。さらに、A の住居では互いが隣人どうしとして対面するため、住居とストリートが相互に乗り入れた状態になる。ストリートの住人が誰かに手を差し伸べるという行為は、ストリートという「戸外」から住居という私的空間に入り込むことを示すと同時に、住人の誰かに扶助を求めるという行為は、私的空間から戸外へ入り込むことも示している。つまり、私的空間が一時的にせよ、ストリートに開放され、相互浸透の関係が生じるのである（図 3）。

次に、住人 C は工具箱をストリートに譲渡して、それを八百屋 D が預かり、必要な住人 E（F,G,H...）に貸すという例をみてみよう。工具箱は住居 C からストリートへ、ストリートから住居 E（F,G,H...）へ移動し、再びストリートへ戻っていくため、先述の一回限りの二者間の扶助とは異なるように見える。しかし、私的空間とストリートの関係を見ると、そこには同じ形式が見いだせる。住人 C の工具箱の譲渡という行為は私的空間とストリートを結びつけ、八百屋 D のそれを預かるという行為はそこが誰でも出入りすることができる場所、ストリートになることを示している。そして、その八百屋 D ＝ストリートが住人 E（F,G,H...）に工具箱を貸すという行為は、顧客とは異なる住人 E（F,G,H...）と直接的に結びつき、一時的に顧客とは異なる私的空間の入り込むことを許すことを示すのである（図 3）。それはストリートへの私的空間の侵入、すなわち、一時的な相互浸透の関係である。したがって、一回限りの相互浸透か、その反復かの違いはあっても、ストリートへの私的空間の一時

方である（もちろん、投稿の場合は実名があるが）。

的な侵入は、私的空間の一時的なストリートへの開放が反転した関係と言えるだろう。加えて、相互浸透では双方の敷居があいまいになるが、あくまで一時的であるため、私的空間とストリートの区別は維持される。

このようなストリートと私的空間の相互浸透の場は、「隣人どうしの関係」の形式の空間的形態と言えるのではないだろうか。相互浸透の場は、ストリートと私的空間の区別は十分に認識されているが、両者の一時的な結びつきによって境界があいまいにされてしまったがために、どちらでもない空間として出現しており、それが「隣人どうしの関係」の形式との相同性が空間的に示されているという意味である。そうした住人たちの直接的な行為を介した相互浸透の場が、「日常的な公共の場」である。「日常的」というのは、ストリートへの私的空間の一時的な開放／侵入は生活のさまざまに異なる局面で発生するため、たとえば、行政単位によって固定された私的空間と公的空間の厳密な領域性とは別の次元にあることを示す（図4）。ストリートが私的空間と公的空間の中間的な存在として、支え合い、助け合い、コモンズの共同管理などの社会維持の機能・役割を果たすような次元では、相互浸透は起こらない。

ストリートと私的空間の相互浸透の場は、あらゆる生活の場面で生成される一時的なものであるが、それが反復されるからこそ、現実のストリートに住む人たちから見れば「いつでも手を差し伸べてくれる誰かと共にいる」ことになる。ゆえに、前述の火事にあった女性が言う「連帯」は、隣人たちの手がしっかりつながれているというよりも、「自分が困ったことになっても、隣人の誰かと共にいる」、いつでも隣人の誰かの手が差し伸べられる状態ではないだろうか。自分の手がつながるすきまが常にあるという意味である。「日常的な公共の場」で生成する「ストリートにともにいる隣人たち」のつながりの感覚とは、一体感や同一性とは別のどこからでもつながることができ、どこででも切断することもできる関係性に由来するものであろう。「隣人どうしの関係」という形式が、そうした自在なつながりを可能にしている。

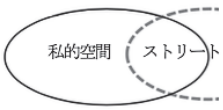

図3　日常的な公共の場

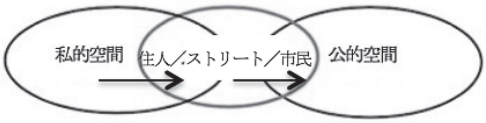

図4　固定化されるストリート

5　おわりに

筆者が *Social Street* の実践に着目したのは、類縁性や関係性をそもそも前提としないつな

がりや共同性は可能だろうかということに関心があり、その社会的実験場のように見えたからである。つまり、*Social Street* の実践は極端な匿名性と個人化の状態に引き裂かれない空間――それをここでは「日常的な公共の場」と呼んだ――の生成と住人の関係の相互作用によって、つながりを形成していくプロセスとして捉えることができると思ったのである。では、このストリートへのアプローチをどうするかというときに、宇田川の論稿の一節がヒントとなった。それは、イタリアの広場を、とにかく人びとが集まって「社交」を展開している場所と捉え、そこにみられる社会関係を「互いが何者にも還元されない「他者」として向き合う関係」、「「他者」同士の関係」である」［宇田川　2004：33-334］という形式の存在から考えたところである。

公共性という観点からすれば、ストリートは広場と同等には扱えないが、住むことを中心に据えるとストリートは住人が誰でも出入りできる「日常的な公共の場」となり、そこでの関係のあり方を問うことができる。もっとも、*Social Street* の実践は「日常的な公共の場」ではもはやないストリートを変えることになったので（意図せざる結果ではあるが）、逆からたどっている。ゆえに、本稿は都市のなかの恒常性、失われたつながり、共同性、連帯性が保持される場所として、ネイバーフッドやストリートの「再発見」の流れに位置するものではない。また、*Social Street* のようなインフォーマルなグループも、中間的な組織、たとえばアソシエーション（任意の組織グループ）のように、参加という形で公的領域に組みこみ、コモンズ（公共財）の管理・運営を推進する――ボローニャもミラノもすでに実施している――といった都市行政への提言でもない[17]。「はじめに」ですでに述べたことの繰り返しになるが、「人と人とがともにあるとはどういうことか、つながり、共同性、連帯とは何かという根源的な問いに向けての試論」となろう。

既存のフェイスブック・グループの特徴であるメンバーの限定性が、グループの閉鎖性をもたらさず、現実のストリートの住人たちを巻き込んでゆく広がりを持ち、ストリートを活性化させる有効な方法に耳目が集まっているが、ヴァーチャルとリアルの混成空間の形成というよりも、その開放的かつ対面的な関係性の地平そのものが、ストリートに出現することが重要なのではないだろうか。その地平にこそ、おそらくさまざまな具体的な存在を共在さ

17）ボローニャおよびミラノの都市行政をみると、新たに *Social Street* や個人のようなインフォーマルなものも、公的領域に関与（コモンズの協同管理・運営）できるようにしている。ボローニャは2014年市民と都市の協同に関する条例を定め、ミラノは2017年 *Social Street* の登録制度を設けている。行政とつながれば、活動はしやすくなるため、ミラノの *Social Street* のいくつかは自発的に登録している。バスティアーニは、そうした動きも *Social Street* の実践の一つの展開であるとしつつも、フォンダッツァ通りはあえてインフォーマルであることを選ぶと述べている。*Social Street* の原点が「社交」にあるからである。ナルダッキオーネも同様の考えを持っているようである。2014年の彼の次のような投稿が示唆的である。「通りの壁がきれいになることそのものに、私は関心がない。その背後にある社交に、惹かれるのである。」

せる可能性があると筆者は考えている。

文献

Agulhon, Maurice

1993 *Il Salotto, Il Circolo e Il Caffè: I luoghi della sociabilità nella Francia borghese (1810–1848)*, Donzelli.

Artusa, Maria Susana

2016 *Pratiche e percorsi di auto-organizzazione di vicinato: il fenomeno della Social Street a Bologna e le reti di prossimità (o di vicinato) a Buenos Aires*, tesi di Dottorato, AMS Università di Bologna.

Augé, Marc

2009 *Nonluoghi. Introduzione a una antropologia della surmodernità*, Eleuthera［2017『非－場所：スーパーモダニティの人類学に向けて』中川真知子訳、水声社］

Bagnasco, Arnaldo

2006 *Tracce di communità*, il Mulino.

Bianchi, Francesca

2019 Presentazione, *Lo spazio dell'interazione*, G.Simmel, Armando Editore, pp. 7-29.

Cornetta, Denise Elena,

2015 *Studio dei fattori che possono aumentare il senso di comunità e la collaborazione in contesti di comunità locali urbane: il ruolo dei social media basati sul Web*, tesi di Dottorato, Università degli Studi di Milano-Bicocca.

Cremaschi, Marco (ed.)

2008 *Tracce di quartieri: Il legame sociale nella città che cambia*, FrancoAngeli.

Oldenburg, Ray

1999 *The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons, and Other Hangouts at the Heart of a Community*, Da Capo Press［2013『サードプレイス――コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』忠平美幸訳、みすず書房］

Kelzer, David

1983 Urban Research in Italy, *Urban Life in Mediterranean Europe: Anthropological Perspectives*, M.Kenny & D.I.Kelzer (ed.), University of Illinoi, pp. 53-75.

Introini, Fabio / Pasqualini, Cristina

2017 Connected Proximity. 'Social Streets' between Social Life and New Forms of Activism, *Roma Tre-Press*: 117-125.

Mandich, Giuliana / Rampazi, Marita

2009 Domesticità e addomesticamento: La costruzione della sfera domestica nella vita quotidiana, *SOCIOLOGI@DRES Quaderni di Ricerca* 9 (1): 1–30.

Manzo, Lidia

2013 Vicini (ma non troppo). Uno studio esplorativo sul tema del vicinato in Italia, *CIDADES, Comunidades e Territórios* 26: 16-39.

Mutti, Antonio

1992 *Il buon vicino: rapporti di vicinato nella metropoli*, Il Mulino.

Pasqualini, Crisitina

2016 Una nuova cultura della socialità: la sfida delle "social street" a Milano, *Milano 2016. Rapporto sulla città. Idee, cultura, immaginazione e la Città metropolitana decolla*, FrancoAngeli, pp. 191-206.

2018a Milano e le sue social street: il"buon vicinato"che ri-genera la città, *Milano 2018. Rapporto sulla città. Agenda 2040*, Franco Angeli, pp. 227-244

2018b Vicini di casa social (i): Il fenomeno (made in Italy) delle social street, *Studi di Sociologia* 2: 213-234.

2018c *Vicini e connessi. Rapporto sulle Social Street a Milano*, Fondazione Giangiacomo Feltrinelli.

2019 Social street: il vicinato al tempo di Internet, *Aggiornamenti sociali* 1/70: 46-54.

Scarpelli, Federico / Cingolani, Caterina (eds.)

2013 *Passare Ponte: Trastevere e il senso del luogo*, Carocci editore.

宇田川妙子

2004 「広場は政治に代われるのか――イタリアの戸外生活再考」『国立民族学博物館研究報告』28 (3): 329–375。

小田亮

2009 「結論と展望――なおも、〈生きられる場〉を穿つために：ネオリベラリズムに抗する〈生きられる文化〉の創造：生活の場としてのストリートのために――流動性と恒常性の対立を超えて」『国立民族学博物館調査報告』81: 489-518。

2018 「災害ユートピアが終わるとき――ストリートを＜コモン＞にするということ」、『ストリート人類学――方法と理論の実践的展開』風響社、467-499 頁。

ジンメル、ゲオルグ

1979 「社交（純粋社会学即ち社会学の一例）『社会学の根本的問題――個人と社会』清水幾太郎訳、岩波文庫、67-92 頁。

1994 「空間と社会の空間的秩序」『社会学』下巻　居安正訳、白水社、216-308 頁。

1999 「大都会と精神生活」川村二郎編訳『ジンメル・エッセイ集』平凡社、173-200 頁。

二宮浩之編

1995 『結びあうかたち――ソシアビリテ論の射程』山川出版社。

バウマン、ジグムント

2001 『リキッド・モダニティ――液状化する社会』森田典正訳、大月書店。

2017 『コミュニティ――安全と自由の戦場』奥井智之訳、ちくま学芸文庫。

ブーバー、マルティン

1978 『我と汝・対話』植田重雄訳、岩波文庫。

ホール、エドワード

1970 『かくれた次元』日高敏隆・佐藤信行訳、みすず書房。

モース、マルセル

1973 「贈与論――太古の社会における交換の諸形態と契機」『社会学と人類学Ⅰ』有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳、弘文堂、219-398 頁。

レヴィ＝ストロース、クロード

1972 「社会科学における人類学の位置、および人類学の教育が提起する諸問題」川田順造訳、『構造人類学』みすず書房、383-426 頁。

1976 『野生の思考』大橋保夫訳、みすず書房。

2005 『レヴィ＝ストロース講義――現代世界と人類学』川田順造・渡辺公三訳、平凡社。

ルフェーブル、アンリ

1974 『都市革命』今井成美訳、晶文社。

参照ウェブサイト

Bastiani, Federico, Ti suonano alla porta alle 21 e salti sulla sedia? Capita, ma domani potresti aprire con social sorriso. Centodieci, 12/08/2014, https://www.centodieci.it/

————, *Blogs*, http://www.federicobastiani.org/categoria-blogs/blogs/.

————, *Prove Tecniche di Facebook Solidale a Bologna: I vicini chiedono aiuto in rete e si danno una mano dal vivo*, TedxPisa, 15/06/2018.

Nardacchione, Luigi, *Discover of relationship*, TedxLakeComo, 20/11/2014.

Il Corriere della Sera, https://milano.corriere.it/

Il boom delle social street a Milano: L'alleanza che rivitalizza i quartieri, 02/08/2016, Davide Ilarietti.

Il Giorno, https://www.ilgiorno.it/

È Milano la capitale del vicinato 2.0: 23mila iscritti alle 71 social street/FOTO, 26/06/2016, Luca Salvi.

Dalla rete al pianerottolo: via Maiocchi prima social street di Milano, 17/12/2013, Luca Salvi e Cecilia Daniele.

Il Quotidiano, https://www.quotidiano.net/

Un anno di via Maiocchi Social Street: il successo del buon vicinato (in versione 2.0), 22/07/2015, Luca Salvi.

Il Sole 24 ore, https://nova.ilsole24ore.com/

Il territorio fa rete, 28/10/2015, Giampaolo Colletti.

L'Avvenire, https://www.avvenire.it/

Facebook. Social street, al servizio del bene comune, 09/08/2016, Silvia Guzzetti.

La Repubblica, https://bologna.repubblica.it/

Si comincia virtuali, si finisce virtuosi: le buone pratiche delle Social Street, 23/03/2014, Caterina Giusberti.

La Repubblica, https://milano.repubblica.it/

Milano, le social street sono diventate adulte: ora il vicinato online è una rete di antenne in città, Oriana Liso. 13/08/2016.

Chi adotta il vicino e chi apre un parco così nei quartieri cresce il miniwelfare: Le social street e i comitati, 16/10/2016, Luca De Vito.

Milano, volontari antidegrado e sicurezza: i Municipi chiamano le social street, 13/11/2017, Alessia Gallione.

Milano, nella social street arrivano i moderatori: "Troppi litigi, ora un filtro ai post", 22/11/2017, Orian Oriana Liso.

E sulla social street c'è voglia di cambiare "Una zona difficile ma stiamo reagendo", 28/04/2018, Alessia Gallione.

La Stampa, https://www.lastampa.it/

I cantieri da soli non bastano, senza cittadini coinvolti si fallisce, 26/11/2015, Giuseppe Salvaggiulo.

Linkiesta, https://www.linkiesta.it/

Ecco le social street: «I vicini di casa? Li ho conosciuti su Facebook, 02/07/2015, Francesco Floris.

New York Times, https://www.nytimes.com/

Italian Neighbors build a social network, 25/08/2015, Gaia Piangiani.

INCHIESTA INNOVAZIONI SOCIALI, *VOLABO*, https://www.volabo.it/, 11/01/2017.

Via Duse e dintorni. “Ci troviamo a ‘La Casa di Isabella’ o di fronte al tazebao?”.

Residenti Cirenaica: una social street di rione. Vivacizzare il quartiere e superare l’insicurezza,

Via del Pratello, la social street della storica strada Bolognese.

Social street ROC. Socialità senza barriere.

Social street di via Fondazza, la prima di tutte: intervista a Federico Bastiani.

Social Street, http://www.socialstreet.it/

Re-creating the relationship between 'neighbors' and connecting the street with everyday life: Social Street experiment in the Italian city of Bologna

Yasuko IMOTO

This paper examines the practice of treating 'neighbor'—without presuming any kind of familial relationship or having any commonality beyond the fact of 'living in the same place'—as neighbors and how it lets the 'street' affect people. Specifically, we focus on the dynamic aspects of the Social Street, started in Via Fondazza, a 400-metre long street in the Santo Stefano district in the Italian city of Bologna, in September 2013.

Focusing on concrete acts, both virtual and real, observed among the residents of the street, we shed light on what kind of relationships develop between the residents, the forms these relationships take, and how this changes the actual street. The main purpose is not to study the cultural characteristics of Italian society, but rather to indicate the distinct forms of mutual relationships and connections that form between street residents without assuming prior relations or associations. This essay addresses fundamental questions such as what it means for people to be with others and what connections, cooperation, and solidarity mean.